

ボランティア活動の動機における自発性と外発性

柴田 和子^{*1} 大東 貢生^{*2}
大山 治彦^{*3} 古川 秀夫^{*4}

The motive of a from outside nature volunteer activity, and non-spontaneity

Kazuko Shibata^{*1}, Takao Otsuka^{*2},
Haruhiko Oyama^{*3} and Hideo Hurukawa^{*4}

In this paper, it analyzes about whether the spontaneity and the non-spontaneity to the activity at the time of a college student beginning a volunteer activity affect an activity motive and future participating will. A college student's experienced of "imposed activity" was more than a half at elementary and junior high schools. Although volition was shown when activity spontaneous in the past was being performed about the future volunteer activity continuation intention, in the case where only the imposed activity is experienced, the volition to activity was low. However, after performing imposed activity, in the case of the person who worked spontaneously, the volition to activity became the highest. The volition to a volunteer activity buds in the imposed activity, and it is thought that it was connected with the volition to spontaneous activity experience or future activity.

はじめに

現在日本国内では700万人を超えるボランティアが活動しており、活動範囲は、社会福祉、環境保護、国際交流などの多分野にわたっている。しかし、今日、ボランティア活動率は特に若い世代で低いという特徴がある（国民生活選好度調査 2000）。ボランティア活動への取り組みについては1995年の阪神・淡路大震災時に全国から大量のボランティアが現地に駆けつけた現象により、社会を支える大きな原動力に発展するものとして関心が高まってきた。その気運の高まりは、1998年に「特定非営利活動促進法」を立案・施行させるに至った。2003年8月現在 NPO 法人数は、全国で12,780法人を数え、さまざまな分野で活動を深めている（内閣府 2003）。

教育におけるボランティアなどの体験活動に関する議論は、1996年の中央教育審議会答申から取り上げられている。これには、昨今のいじめ、引きこもりなど教育現場の混乱からの打開を目指し、社会性や豊かな人間性を育む場としてのボランティア活動に期待を寄せる意見が反映されている。2000年12月に提出された「教育改革国民会議報告」では、人間性豊かな日本人を育成するために、「奉仕活動を全員が行うようにする」ことが提案された。文部科学省は2001年1月に教育改革のた

*1 龍谷大学社会学部, *2 佛教大学社会学部, *3 四国学院短期大学, *4 龍谷大学国際文化学部

めの主要施策や課題および実行するためのタイムスケジュールを取りまとめた「21世紀教育新生プラン」を策定して奉仕活動を全員が行えるようにすることを政策課題に揚げ、2001年にはそれを元に学校教育法および社会教育法が改正された（林 2002：38-39）。

上記で述べた「奉仕活動」について追加説明しておく、学校教育法および社会教育法改正における奉仕活動・ボランティア活動に関しては、1996年から名称に関する議論が継続審議されてきた。すなわち「ボランティア」は、「有志、志願者」の意味を持つために学校が全校を揚げて取り組む活動の名称にはふさわしくないとして、従来用いられていた「奉仕活動」に置き換えようとした。しかし、「奉仕活動」には戦前日本の「滅私奉公」のイメージがあるために、そのまま用いることには抵抗があった。そこで、2002年7月、中央教育審議会の答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の中では、言葉を「奉仕活動・体験活動」に統一してその意味の中にボランティア活動を含ませようとした¹⁾。中央教育審議会は、「奉仕活動・体験活動」を「自分の時間を提供し、対価を目的とせず、自分を含め地域や社会のために役立つ活動」と幅広く捉え、社会全体として推進する必要があると答えている。

このように「奉仕活動・体験活動」は、「他者への献身や奉仕を可能にし、思いやりの心を育てる（教育改革国民会議報告 2000）」ための、他者理解を深める活動と位置づけられている。しかし、その一方で、正規授業として取り入れられることにより、実質的に活動を強制される、内容によっては子どもの思想・心情の自由を侵害しかねないと危惧されるようになっている。

それでは学校教育におけるボランティア活動への自発的、外発的関わりへの活動意識に対する影響はどのように考えていけばよいのだろうか。活動を強要することへの影響に関してはデータはなく議論されるのみである。そこで、過去に小・中学生であった現大学生が行った外発的なボランティア活動が及ぼす影響を分析することにより、今後の学校教育におけるボランティア活動実施の影響を予測することができるであろう。

本稿では、大学生がボランティア活動を始める際の自発的・外発的関与が活動動機や今後の参加意志に影響を及ぼすかどうかについて分析する。動機、実際の活動への参加度、今後の活動への参加意思に至る一連の活動意志を時系列的に分析することにより、彼らの活動へ至る因果関係を明らかにする。

1. 調査の方法と調査対象者

大学生のボランティア活動の実態はどのようなものであろうか。また、どのような動機でボランティア活動を行おうとしているのか、彼らの動機を顕著に表す比較材料として、1998年に行った国際ボランティア活動従事者への調査、震災ボランティア活動経験者への調査データを用いた²⁾。

(1) 「学生のボランティアに関する意識調査」

調査は、関西地区に住む6大学の大学生（滋賀県立大学、龍谷大学、佛教大学、追手門学院大学、大阪府立大学、神戸学院大学）を対象として、授業時間に配布・回収する集合調査の形をとった。期間は2002年6月～7月である。有効回答数は870票であった。今回の分析に用いた項目は、小・中・高・高校卒業後のそれぞれの時期に行った「自ら進んで行ったボランティア活動」と「それ以外の活動」内容についての質問項目と、その時の動機についての項目である。基本属性は、男性

表1 大学生の学年・性別

						合計
	一回生	二回生	三回生	四回生	五回生以上	
男性	246 65.3%	78 20.7%	45 11.9%	7 1.9%	1 .3%	377 100.0%
女性	346 73.2%	88 18.6%	31 6.6%	8 1.7%		473 100.0%
合計	592 69.6%	166 19.5%	76 8.9%	15 1.8%	1 .1%	850 100.0%

表2 国際ボランティア活動従事者の年齢・性別

							合計
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	
女性	17 22.1%	15 19.5%	22 28.6%	18 23.4%	4 5.2%	1 1.3%	77 100.0%
男性	5 5.3%	20 21.3%	19 20.2%	25 26.6%	19 20.2%	6 6.4%	94 100.0%
合計	22 12.9%	35 20.5%	41 24.0%	43 25.1%	23 13.5%	7 4.1%	171 100.0%

377人（44.4%）、女性473人（55.6%）、学年は1年生が約7割であった（表1）。

(2) 国際ボランティア活動従事者へのアンケート

『NGOダイレクトリー'96』『インターピープルダイレクトリー'94』から抽出した全国の国際ボランティア団体376団体を調査対象として、団体の中で中心的役割を担う人を回答者に指定した。調査期間は1998年5月～6月で郵送法で行った。有効回答数は174票（47.4%）であった。今回の分析に用いた質問項目は、活動の動機についての項目である。回答者の属性は、男性94人（55.0%）、女性77人（45.0%）で4,50歳代がやや多く、40歳代が41人（24.0%）、50歳代が43人（25.1%）であった（表2）。

(3) 震災ボランティア従事者への調査

調査は、阪神・淡路大震災直後から活動していたボランティア団体「兵庫区ボランティア」に所属していた1000人を対象に1998年10月～12月に郵送法で行った。調査票及び回答用紙は、グループが発行する会報紙に同封してもらい、返信用封筒を用いて返送する形を取った。1回目の有効回答数は114票（11.4%）であった。1回目の回収時に10, 20歳代の回答が極端に少なかったため、再度10, 20歳代の200人に限定して調査票を配布した。2回目は有効回答数31票（15.5%）であった。今回の分析に用いた質問項目は、活動を始めた動機についての項目である。属性については、男性62人（43.3%）、女性81人（56.7%）で20代が一番多く49人（34.3%）であった（表3）。

表3 震災ボランティア活動経験者の年齢・性別

								合計
	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	
男性	2 3.2%	23 37.1%	7 11.3%	11 17.7%	6 9.7%	9 14.5%	4 6.5%	62 100.0%
女性	1 1.2%	26 32.1%	12 14.8%	10 12.3%	17 21.0%	13 16.0%	2 2.5%	81 100.0%
合計	3 2.1%	49 34.3%	19 14.7%	21 16.1%	23 15.4%	22 15.4%	6 4.2%	143 100.0%

表4 活動分類

1. 地域での活動（子供会やお祭り、自主防災・防犯活動など）
2. 体育・スポーツ活動（スポーツレクリエーション指導など）
3. 文化・芸術活動（博物館や美術館等の文化施設、伝統的建築物等での説明、美術・音楽の指導など）
4. イベント（コンサートやスポーツ、講演等）の手伝い
5. 自然・環境保護に関する活動（環境美化、リサイクル活動。牛乳パックの回収など）
6. 国際交流・協力に関する活動（難民援助、技術援助、留学生援助など）
7. 社会福祉に関する活動（老人や障害者などに対する介護、身のまわりの世話など）
8. 保健・医療・衛生にかんする活動（患者会組織・病院ボランティアなど）
9. 災害救助活動
10. なし

2. 結 果

2-1 大学生のボランティア経験の実態

小学生、中学生、高校生、高校卒業後の4つの時間区分において最も時間と労力をかけた「自ら進んでおこなったボランティア活動」と「それ以外の課されたボランティア活動」について、行った活動を挙げてもらった。活動分野は、福祉、環境などのボランティア既存分野だけでなく、表4に挙げたように広い分野を念頭において活動内容に組み込んだ。今回分析対象とした「大学生のボランティア活動に関する意識調査」の分類は、2002年7月の中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策などについて」で取り上げている活動分野でもあり、これは、1998年に制定された「特別非営利活動促進法」で記された分類を採用している（表4）³⁾。つまり、「それ以外の課されたボランティア活動」についての回答は、「奉仕活動・体験活動」が正規授業になる以前の段階で過去に小・中・高校や地域により外発的に行われた活動であるということができる。

本稿では、活動内容についての詳細ではなく、時期ごとの活動の有無について考察する。表5は、時間区分ごとの自発的・課されたボランティア活動経験者をまとめたものである。

まず、「課された活動」についての参加は、「7～12歳」459人（60.3%）、「13～15歳」413人（54.8%）、「16～18歳」298人（39.6%）、「19歳～」113人（15.2%）である。小・中学校の時期には、半数以上の人がボランティア活動を行っていることが分かる。「奉仕活動・体験活動」が議論される以前から学校あるいは地域で学生たちはボランティアを課されていた。年齢が上がるにつれてボランティア活動経験者が減少するが、高校でも約4割が活動を経験している。

「自発的活動」についての参加度は、
「7～12歳」321人（41.9%）、「13～15歳」275人（36.7%）、「16～18歳」252人（33.5%）、「19歳～」176人（15.2%）である。年齢が上昇しても活動を行う人の割合はそれほど減少していない。学生生活の中で全体の3割以上は自発的にボランティア活動を行っていたことがわかる。

表5 大学生のボランティア活動経験

	自発的活動		課された活動	
	度数	%	度数	%
7～12歳（小学生の頃）	321	41.9	459	60.3
13～15歳（中学校の頃）	275	36.7	413	54.8
16～18歳（高校の頃）	252	33.5	298	39.6
19歳～（高校卒業後）	176	23.5	113	15.2

2-2 活動経験と今後の活動意志

過去の活動経験が現時点におけるボランティア活動への意欲や継続意志にどのような影響を与えるのか検討を加えた。過去の活動経験における自発性・外発性に着目して、活動経験のパターン化を行った。質問では、四つの時間区分ごとに自発的活動経験・課された活動経験を答えてもらったが、時系列を考慮した場合複雑になりすぎるために、単純化して自発的活動経験・課された活動経験の有無により4つのパターンを構成した（表6）。

すなわち、1つ目は過去に活動経験がない人のグループである「課された活動経験なし、自発的活動経験なし」、2つ目は、課された活動のみ経験がある人のグループ「課された活動経験あり、自発的活動経験なし」、3つ目は、自発的活動のみ経験がある人のグループ「課された活動経験なし、自発的活動経験あり」、4つ目は、自発的活動・課された活動どちらも経験がある人のグループ「課された活動経験あり、自発的活動経験あり」である。一番多いのは「課された活動経験あり、自発的活動経験あり」の364人（49.5%）でほぼ半数に至り、二番目に多いのが「課された活動経験あり、自発的活動経験なし」の179人（24.2%）であった。

4つ目の「課された活動経験あり、自発的活動経験あり」パターンは、その中からさらに時系列的变化過程を含んだ「課された活動経験から自発的活動経験へ移行」したパターンを析出した。自発性の萌芽を読み取ることができる5つ目のパターンは、「奉仕活動・体験活動」を教育現場に導入する際に期待されうる活動パターンであると考えることができる。このパターンは82人（11.1%）存在した。

次に、各パターンにおけるボランティア継続意志への相違を検討した。ボランティア活動意欲については、「今後あなたはボランティア活動をやりたい・続けてみたいと思いますか」という

表6 大学生のボランティア活動類型

	度数	%
課された活動経験なし、自発的活動経験なし	111	15.0
課された活動経験あり、自発的活動経験なし	179	24.2
課された活動経験なし、自発的活動経験あり	84	11.4
課された活動経験あり、自発的活動経験あり	364	49.5
合計	740	100.0
（課された活動経験あり、自発的活動経験ありから抽出）		
課された活動経験から自発的活動経験へ以降	82	11.1

表7 大学生のボランティア活動経験パターン別今後の活動意欲

活動パターン	平均値			
課された活動経験なし・自発的活動経験なし	3.91	* * * *	**	**
課された活動経験あり・自発的活動経験なし	4.183			
課された活動経験なし・自発的活動経験あり	4.864			
課された活動経験あり・自発的活動経験あり	4.856			
課された活動経験から自発的活動経験へ以降	5.146			

* $P < .05$ ** $P < .001$

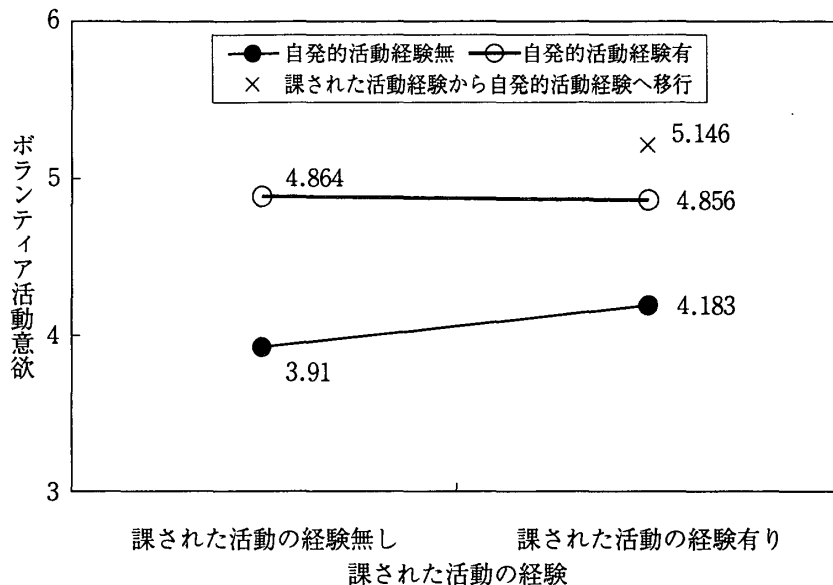


図1 大学生のボランティア活動経験と活動意欲

問いに「非常にやってみしたい（7ポイント）」から「全くやりたくない（1ポイント）」まで7段階の点数をつけ、各パターンの平均点を算出した（表7，図1）。

「課された活動経験なし，自発的活動経験なし」，つまり活動経験がない場合は3.91点と活動意欲は低くなっている。「課された活動経験あり，自発的活動経験なし」は，4.183ポイントで活動を行っていない人よりは課された活動を行った人の方が有意に高かった。「課された活動経験なし，自発的活動経験あり」の場合はボランティア活動意欲が4.864ポイント，「課された活動経験あり，自発的活動経験あり」の場合は，ボランティア活動意欲は4.856ポイントではほぼ同様のポイントであった。課された活動の有無に関わらず自発的活動経験がある場合は，どちらもほぼ同じ活動意欲の高さを示した。

次に，「課された活動経験から自発的活動経験へ移行」したパターンは，5.146であり一番高い数値を示した。活動経験が全くない場合や「課された活動経験」のみあるパターンや「課された活動経験，自発的活動経験」どちらもある場合よりも有意に高い数値であった。学校によりボランティアの機会を与えることは，ボランティア活動への意欲を高めるために意味を持つことが予想される。課された活動が自発的活動の牽引役となった場合は，今後の活動についても大いに継続する意志を持っているということが分かる。

2-3 大学生のボランティア活動に対する動機

大学生が過去にボランティア活動を行った際にどのような要因が影響していたのか。ボランティア活動を行った人に対して、「あなたがボランティア活動を始めたのは、どのような動機からですか。」の質問に対して33項目から重要と思われるものから順に3つ選び答えてもらった。今回は、一番に挙げられた動機について分析の対象とした（表8）。灰色部分の上位10項目について、分析の際に質問項目の中で意味内容が類似しているものが含まれるために質問項目の意味を考えながら分類した。

すなわち、「自分の役に立つ」「自分にやりたいことを発見した」「自分を変えたかった」「友人や知り合いが増やせそうだったから」などの自己向上的な動機と「就職などで有利になるようにした

表8 大学生のボランティア活動に関する動機

	度数	%
1 自分の役に立つと思ったから	111	13.3
2 社会や人のために役に立ちたかったから	86	10.3
3 学校がボランティア活動を課していたから	82	9.8
4 ボランティア活動を体験したかったから	80	9.6
5 就職などで有利になるようにしたいから	64	7.7
6 自分のやりたいことを発見したいから	52	6.2
7 地域や社会をよりよくしたいから	43	5.1
8 自分を変えたかったから	41	4.9
9 活動テーマに興味があったから	36	4.3
10 友人や知り合いが増やせそうだったから	28	3.4
11 暇な時間があったから	23	2.8
12 人間関係上、やむをえず	23	2.8
13 友人や知り合いにすすめられて	19	2.3
14 活動している（いた）人たちに共感したから	14	1.7
15 活動のようすが楽しそうだったから	14	1.7
16 これをすることが自分の使命だと思ったから	11	1.3
17 社会的に評価されたいから	10	1.2
18 現地の人たちと一緒に活動したかったから	10	1.2
19 問題の重大さに衝撃を受けたから	10	1.2
20 自分の経験が生かせそうだったから	10	1.2
21 家族や親せきにすすめられて	9	1.1
22 海外で活動したいと思ったから	8	1.0
23 困っている人に同情したから	7	0.8
24 自分の専門性（技術・知識・能力）が生かせそうだったから	7	0.8
25 人からその気にさせられて	6	0.7
26 異文化を体験したかったから	5	0.6
27 現地の人たちの生き方などに共感したから	4	0.5
28 人と違うことをしてみたかったから	4	0.5
29 恵まれている者の義務だと思ったから	4	0.5
30 ボランティアに助けてもらった経験から	4	0.5
31 信仰や宗教上の理由から	4	0.5
32 過去のおこないに対する罪ほろぼしをしたかったから	3	0.4
33 日本と外国との関係をよくしたいと思ったから	3	0.4
合計	835	100.0

表9 国際ボランティア従事者の活動動機

	度数	%
1 問題の重要さに衝撃を受けた	19	12.8
2 社会や人のために役立ちたい	14	9.4
3 活動テーマに興味があった	14	9.4
4 現地の人の生き方に共感	13	8.7
5 活動している人たちに共感	12	8.1
6 自分の使命と思った	9	6.0
7 現地の人と一緒に活動したい	8	5.4
8 専門性が生かせそうだった	7	4.7
9 友人や知り合いにすすめられて	7	4.7
10 自分の経験が生かせそうだった	5	3.4
11 将来自分の役に立つ	4	2.7
12 人間関係上やむをえず	4	2.7
13 その気にさせられて	4	2.7
14 罪滅ぼしをしたかった	4	2.7
15 困っている人に同情	3	2.0
16 恵めれているものの義務と思った	3	2.0
17 活動の様子が楽しそうだった	3	2.0
18 日本と外国の関係をよくしたかった	3	2.0
19 海外で活動したいと思った	3	2.0
20 自分を変えたかった	2	1.3
21 内外的に評価されたい	2	1.3
22 日本や日本人について問い直したかった	2	1.3
23 暇な時間があった	1	0.7
24 活動を体験したかった	1	0.7
25 異文化を体験したかった	1	0.7
26 信仰や宗教上の理由から	1	0.7
合計	149	100.0

いから」の手段的動機を合わせて〈利己的動機〉とした。

「学校がボランティア活動を課していた」は、他者からの勧誘が最大要因であることから〈他者誘導的動機〉とした。

「社会や人のために役立ちたかった」「地域や社会をよりよくしたい」は、自分よりも他者の利益を第一義に考えて行動しているために〈利他的動機〉とした。

「活動を体験したい」「活動テーマに興味があった」は、活動内容についての興味が動機となっているために〈活動への興味動機〉とした。

分類ごとの割合を算出すると、〈利己的動機〉が32.1%で最も多く、次に〈利他的動機〉が15.4%〈活動への興味動機〉が13.9%、〈他者誘導動機〉が9.8%であった。大学生の場合は、自己の利益を動機とする〈利己的動機〉が全体の3割を超える結果となった。

では、実際に活動している他のボランティア団体の活動動機と比較するために、国際ボランティア団体と震災ボランティア団体を対称にしたアンケートを用いて比較をする。

表9は、国際ボランティア従事者の活動動機について多いものから順に並べている。国際ボランティア活動従事者の活動動機について上位10位に上がっているものについて見ると、「問題の重要さ

表10 震災ボランティア活動従事者の動機

	度数	%
1 被災者の役に立ちたかったから	51	42.1
2 被災しなかった者の義務だと思った	28	23.1
3 自分自身の勉強になると思った	14	11.6
4 活動している人たちの姿に共感したから	10	8.3
5 被災地が大好きな神戸だから	9	7.4
6 新しい出会いを求めて	5	4.1
7 好奇心から	3	2.5
8 自分を変えたかったから	1	0.8
合計	121	100.0

に衝撃を受けた」「活動テーマに興味があった」「活動している人たちに共感」「自分の使命と思った」「現地の人と一緒に活動したい」といった〈活動への関心動機〉が全体の35.7%,「社会や人のために役立ちたい」といった〈利他的動機〉が9.4%であった。自分のためというよりはむしろ活動そのものへの興味関心や社会貢献の意志により活動を始めようとしているようすが伺える。

表10は、震災ボランティア活動従事者の活動動機について多いものから順に並べたものである。震災ボランティア活動従事者の上位に占める動機には、「被災者の役に立ちたかったから」「被災しなかったものの義務だと思った」といった〈利他的動機〉65.2%,「自分自身の勉強になると思った」の〈利己的動機〉11.6%といったものが占めた。

国際ボランティアや震災ボランティアのようなボランティア経験者は、他者の役に立ちたいとする社会貢献的精神や共感性を持って活動を行う〈利他的動機〉や活動そのものへの興味・関心から活動を始めようとする〈活動への興味動機〉が活動の動機となっているのに対して、大学生は自分の役に立つために活動を開始しようとする自分本位の動機である〈利己的動機〉や地域や社会の役に立とうとする〈利他的動機〉が多数を占めた。また、学校からの強制により活動するといった他者からの誘導である〈他者誘導的動機〉が見られたのも特徴的である⁴⁾。

2-4 大学生の活動意識別動機の解明

自発的・課された活動経験の有無により、動機がどのように異なってくるかについて調べた。前述した10項目に加えて23項目も内容により分類を行った(表11)。

すなわち、「自分の役に立つ」「自分にやりたいことを発見した」「自分を変えたかった」「人と違うことをしてみたかったから」「友人や知り合いが増やせそうだったから」などの自己向上的な動機と「就職などで有利になるようにしたいから」「社会的に評価されたいから」などの手段的動機を合わせて〈利己的動機〉とした。

「学校がボランティア活動を課していた」「人間関係上やむをえず」「人からその気にさせられて」「家族や親戚にすすめられて」「友人や知り合いにすすめられて」は、他者からの勧誘が最大要因であることから〈他者誘導的動機〉とした。

「人のために役立つ」「地域や社会をよりよくしたい」「日本と外国との関係をよくしたい」「困っている人に同情したから」は、自分よりも他者の利益を第一義に考えて行動しているために〈利他的動機〉とした。

表11 大学生のボランティア活動類型別活動動機

		課された 活動なし 自発的 活動なし	課された 活動あり 自発的 活動なし	課された 活動なし 自発的 活動あり	課された 活動あり 自発的 活動あり	計	課された 活動から 自発的 活動へ
利己的動機	自分の役に立つと思ったから	18.7	6.2	16.9	12.9	12.6	12.2
	自分のやりたいことを発見したいから	5.6	7.9	3.6	5.6	5.9	4.9
	自分を変えたかったから	4.7	6.8	3.6	5.3	5.4	3.7
	人と違うことをしてみたかったから				0.6	0.3	
	就職などで有利になるようにしたいから	15.0	8.5	7.2	5.6	7.9	3.7
	社会的に評価されたいから	1.9	1.7	1.2	0.6	1.1	1.2
	友人や知りあいが増やせそうだったから	4.7	2.8	3.6	2.8	3.2	2.4
	小計	50.5	33.9	36.1	33.4	36.3	28.0
他者誘導動機	学校がボランティア活動を課していたから	4.7	18.1	1.2	7.8	9.1	
	人間関係上、やむをえず	4.7	3.4	2.4	1.4	2.5	1.2
	人からその気にさせられて		0.6	1.2	0.6	0.6	
	友人や知りあいにすすめられて	0.9	1.7	3.6	2.2	2.1	3.7
	家族や親せきにすすめられて		0.6	2.4	0.6	0.7	
	小計	10.3	24.3	10.8	4.6	14.9	4.9
利他的動機	困っている人に同情したから			2.4	0.8	0.7	
	地域や社会をよりよくしたいから	1.9	5.6	9.6	5.9	5.7	7.3
	社会や人のために役に立ちたかったから	16.8	8.5	7.2	10.1	10.4	12.2
	日本と外国との関係をよくしたいと思ったから		0.6		0.6	0.4	
	小計	18.7	14.7	19.3	17.4	17.1	19.5
活動への興味動機	現地の人たちと一緒に活動したかったから		2.3		1.4	1.2	
	活動している（いた）人たちに共感したから	0.9	1.7	1.2	2.5	1.9	2.4
	活動テーマに興味があったから	4.7	1.7	7.2	4.5	4.1	7.3
	ボランティア活動を体験したかったから	2.8	8.5	9.6	12.3	9.7	20.7
	活動のようすが楽しそうだったから	1.9	1.1	1.2	1.7	1.5	1.2
	小計	10.3	15.3	19.3	22.4	18.5	31.7
社会参加動機	自分の専門性(技術・知識・能力)が生かせそうだったから		1.7		1.1	1.0	2.4
	自分の経験が生かせそうだったから	0.9	0.6	1.2	1.1	1.0	1.2
	異文化を体験したかったから	0.9		1.2	0.6	0.6	1.2
	海外で活動したいと思ったから			2.4	0.8	0.7	1.2
	小計	1.8	2.3	4.8	3.6	3.2	6.1
その他の動機	現地の人たちの生き方などに共感したから	0.9	0.6		0.6	0.6	1.2
	これを行うことが自分の使命だと思ったから		1.1	1.2	1.7	1.2	1.2
	暇な時間があったから	1.9	2.3	4.8	2.2	2.5	2.4
	恵まれている者の義務だと思ったから		1.7		0.3	0.6	
	問題の重大さに衝撃を受けたから	1.9	1.1		1.7	1.4	1.2
	ボランティアに助けてもらった経験から	0.9	0.6	1.2	0.3	0.6	1.2
	過去のおこないに対する罪ほろぼしをしたかったから	1.9			0.3	0.4	1.2
	信仰や宗教上の理由から			1.2	0.6	0.4	
	その他	0.9	2.3	1.2	3.1	2.3	1.2
	小計	8.4	9.6	9.6	10.8	9.9	9.8
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

「活動を体験したい」「活動テーマに興味があった」「活動が楽しそうだったから」「現地の人たちと一緒に活動したかった」「活動している人たちに共感」は、活動内容についての興味が動機となっているために〈活動への興味動機〉とした。

「自分の専門性が生かせそうだから」「自分の経験が生かせそうだったから」「異文化を体験したかったから」「海外で活動したいと思ったから」は、自分の持ちうる資源を利用して社会に役立てたいとする動機であるため〈社会参加的動機〉とした。

それ以外の分類が困難な項目は〈その他の動機〉とした。

「課された活動なし、自発的活動なし」、すなわち活動未経験者の場合は、活動をしようとした場合を想定して回答してもらった。これは、学生のボランティア活動に対する一般的な意識を反映していると考えることができる。〈利己的動機〉が全体の52.3%と半数以上を占めた。ボランティアは自分のためにやるものだとのイメージが大学生の場合顕著である。その中でも「自分の役に立つと思ったから」(18.7%)の自己向上的な動機や、「就職などで有利になるようにしたいから」(15.0%)の手段的な動機を持つ人が多数を占めた。また、〈利他的動機〉である「社会や人のために役に立ちたかったから」(16.8%)と回答した人も多く、ボランティア活動未経験者の場合は活動のイメージを自己の利益や他者の役に立つための活動と認識をしている様子が伺える。

「課された活動あり、自発的活動無し」は、他パターンと比較すると〈他者誘導動機〉が24.3%と多い。他者から促されたことがきっかけで活動を行うようになったとの意識を強く持っていることが分かる。

「課された活動なし、自発的活動あり」は、他パターンと比較すると〈利他的動機〉が19.3%と一番高い。また、〈利己的動機〉は37.3%で、その中に分類される「自分に役に立つと思ったから」の項目は16.9%と高い値を示した。

「課された活動あり、自発的活動あり」は、他パターンと比較すると〈活動への興味動機〉が22.4%と多くを占めている。まず活動テーマやボランティア活動自体に興味を持つことがきっかけとなり活動を始めている人が多いことが分かる。

「課された活動から自発的活動経験へ以降」したパターンについては、他パターンと比較すると〈活動への興味動機〉が31.7%と高い値を示している。また、〈利他的動機〉も19.5%と高い。反対に、過去に課された活動を行っていたにもかかわらず〈他者誘導動機〉が4.9%と極端に少ない。

「課された活動から自発的活動に移行」した人は、印象に残っているボランティア活動の中に「課された」印象が残っている人はごく少数で、自発的活動を行った際の動機の方が印象に残っているためにこのような結果がでたと考えられる。

3. 考察と今後の課題

本稿では、大学生の過去のボランティア活動実態を明らかにした。小・中学校でのボランティア活動が義務化されていない時期を過ごした現在の大学生でも、ボランティア活動経験者は多数にのぼった。「課された活動」経験者は、小学校では6割以上、中学校でも5割以上であった。過去の活動が今後のボランティア活動に影響を及ぼしているのかについて分析したところ、過去に自発的な活動を行っている場合は、今後のボランティア活動開始に意欲を示すが、課された活動のみ体験した場合では今後の活動への意欲は低かった。ただし、課された活動を行った後、自発的に活動を

行った人の場合は、今後の活動への意欲が一番高くなった。課された活動を行う中でボランティア活動への意欲が芽生えたならば、それが自発的な活動や将来への活動意欲につながると考えられる。さらに、大学生は過去にどういった動機を持ちながら活動を開始したのかについて課された活動を行った人、自発的な活動を行った人、あるいは両方行った人について分析をすると、全般的に「自分の役に立つと思ったから」などの項目からなる〈利己的動機〉を挙げる人が多かった。この動機は、他のボランティア活動経験者と比較しても多く、大学生のボランティア活動経験者の動機として特徴的なものであった。自発的活動を行った人の場合は、〈活動への興味動機〉が次に多く、課された活動を行った人の場合は、〈他者誘導動機〉を挙げる人が多かった。課された活動から自発的活動へ移行した人の場合は、特に「ボランティア活動を体験したい」をあげている人が多く、〈活動への興味動機〉が群を抜いて高かった。学校や地域から課されてボランティア活動を始めたとしても、その活動やボランティア活動自体に興味を持てば、今後の自発的なボランティア活動につながっていくことが分かった。

今後「奉仕活動・体験活動」がすべての教育現場に導入されることが予想される。今回の調査では、小学校の時期に「奉仕活動・体験活動」を行っていたものが回答者の6割以上であったが、今後はほぼ100%になる。課された活動のみの人の動機は「学校がボランティア活動を課していた」が第一義にくることが予測されることから、「奉仕活動・体験活動」を導入する際にも、課されたという印象を持たせるのではなく、自発的活動につなげるような工夫が必要となってくるだろう。活動選択の自由や、課した活動でもその活動内容について自発的に考えさせるなどの方法が考えられる。また、活動を〈利己的動機〉から始める人が多かったことから、就職の際の評価や履修単位に反映させるなど、ボランティア活動を実施する際に、教育現場における利己的な動機を満足させるものを導入する必要があると考えられる。

注

- 1) 中央教育審議会では当初、「ボランティア活動」の導入を提案していた。しかし、ボランティア活動とは語源のとおり自発性を重んじる活動であるために、学校から強制的に行う活動を「ボランティア」と称することは御幣が生ずると反論が出た。中央教育審議会は、「自発性は重要な要素であるが、個人がさまざまなきっかけから活動をはじめ、活動を通じてその意義を深く認識し活動を続けるということが認められてよい」と考え、学校教育においては「自発性は活動の要件でなく活動の成果」(2002 中央教育審議会答申)と捉え、自発性があるか否かというよりも奉仕活動を行うことそのものに意義があると捉えた。中央教育審議会の答申では、1996年から「ボランティア」の言葉が盛んに取り上げられた。しかし、2000年に総理大臣の私的諮問機関として発足した「教育改革国民会議」報告では、「ボランティア」の言葉はなく「奉仕活動」のみとなっている。これを受けて中央教育審議会の2002年7月の答申では、タイトルや見出しを「奉仕活動・体験活動」に統一した。しかし、「ボランティア」の語は「奉仕」の108箇所よりも多い179箇所に出現する。ここには「奉仕」と「ボランティア」の言葉の使い方に明確な違いは示されていないが、二つを併用しなければならない現実があるということが出来る(池田 2002:20)。
- 2) この三種のアンケートは、龍谷大学国際社会文化研究所の共同研究として行った。
- 3) 「大学生のボランティアに関する調査」は、NPO法で採用した12分類を基にして作成している。
- 4) 「国際ボランティア従事者」「震災ボランティア従事者」の動機を年齢別に分析した場合、〈利己的動機〉について国際ボランティア従事者の場合、回答項目数が多いためにはっきりとした数値は出なかったが、震災ボランティア従事者の10, 20代は30.4%で、30代7.6%, 40代, 50代, 60, 70代以上の4.6%と比較して高い数値を示した。したがって〈利己的動機〉により活動を始めることは、年齢的な傾向とすることができる。

参考文献

- 経済企画庁国民生活局国民生活調査課編『平成12年 国民生活白書』, 2000
経済企画庁国民生活局編『平成12年度 国民生活選好度調査』, 2001
長沼豊『子どもの奉仕活動・ボランティア活動をどう進めるか』教育開発研究所, 2002
古川秀夫編著『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所, 2002
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/ 中央教育審議会, 2002
<http://www.5.cao.go.jp/seikatsu/npo/index.htm/> 内閣府 NPO ホームページ, 2003